

ユートピアという統制的理念を リアリズムで示す二十世紀SFの古典

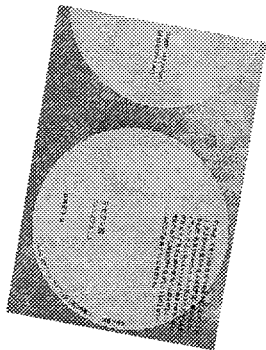
レム自身が再刊や翻訳を拒絶してきた問題作が ついに日本語で読める

岡和田 晃

スタニスワフ・レム 著
後藤正子 訳
沼野充義 解説

▶ マゼラン雲

4・28刊 四六変型判504頁 本体2700円
国書刊行会



スタニスワフ・レム(一九二一〜二〇〇六)は科学小説としてのSFと、思弁小説としてのSFを高次元融合させた二十世紀文学の隻手として、今なお深い尊敬の念を集めている。懐旧ではない。軍械と兵器・脳科学を扱う『地球の平和』(一九八四脱稿)、記録の改竄やフランク・ニュースをモチーフとした『現場検証』(一九八一年稿)等、現在でも真価がわゆるような仕事を数多く遺しているからだ。後者の日本版(新潮)『泰平』の現場検証、深見弾(一九八三、ハヤカワ文庫SF)ほか入手が難しくなっている作品もあるが、それでも『技術大全』等の理論書の全訳を除き

主要な著作のほとんどは日本語訳されている。現在、『地球の平和』(沼野彰訳、二〇三)を含む国書刊行会の『スタニスワフ・レム・コレクション』第二期が刊行中だが、最大の衝撃は本書『マゼラン雲』(一九五五出版)と『マゼラン星雲』と呼ばれるものが多かったが、ライオンクラブに含まれていないのではないか。

舞台は三十二世紀、太陽系全域を植民化した人類は、二百二十七名の乗員で成程した巨大な宇宙船「ゲア」を、二十一層建てで、太陽系外のうちもとも近ハ恒星である「クロキミア・クンタワリ」と向かう。それを太陽から最大の光速の半分を超える速度を出せる「ゲア」号をもってして二千年はかかる遠征。序盤は語の手が宇宙飛行士になるまでの会話から始まり、中盤以降は船内で起きた様々な事件が神話語のように語られていく……といった構成になっている。叙述スタイルはリアリズムで、技術の発展度は指数関数的ではないため、一種の宇宙航行「ミュージック」としても読める。

実際、太陽系を脱出する際、いよいよ目的地が近づく際の描写は美しい。記号の戯れに阻じた類の「エンターテインメント」とはまた違うSFの原初的な喜びがある。

けれども、本書は一九七〇年から二〇〇五年までの間、レム自身が再刊や翻訳を拒絶していた。作者自身の弁じられる、『マゼラン星雲』は、今ではあれは芸術性の低い作品だと思つていい。また、よもその前へ、あそこを描いた未来像は理想化されすぎている。今のわたしの信念と合わないんだ。だから、どこでだろうと翻訳は出してもらいたくないのだ。これは翻訳家の深見弾が、ポラードのクラブにある作家スタニスワフ・レムの昆を訪問した際の発言である(『SF宝庫』一九八〇年八月号、私が企画し、大野典宏・川嶋信希の尽力でネット・カンパニー Prologue Wave)に再録が実現。深見は「レム文学を理解するためぜひ日本語に紹介したい」と食いついたが、それだけだ。レム研究者のためには非営利的な出版のため、か念を押したところ、答えはまったく同じだったと述べている。本書の解説を担

懐している。本書の解説を担当した沼野充義は、レムに日本語訳を打診した者が誰なのか気になる書いしているが、答えはことこのきの深見ではないか。

そんな口ぶきの『マゼラン雲』だが、後藤正子によって練られた訳文も伝正つてか、「芸術性の低い」作品という印象は受けない。これが駄目なら小松左京の『日本SF』なのを九割方が「芸術性が低い」と言つたことになってしまふ。後藤正子氏は、本書は一九七〇年までポラード国内だけで十数部近くが発刊され、東欧圏でも広く読まれた。もともと物の理を連載されていたこともあり、『プロム』(一九六二)以前のレムの作品では、もともとも人口に膾炙した作品だったのかもしれない。けれども『ロバ・カンガ』小説としての性格は薄だ。共產主義の理想はずで達成された後たのびと遊ばされ、技術への関心が強調される。単純労働はオートマタ(ロボット)こそないが、人々はアレ

芸術

英の結晶体トリオンに情報は集約させられ、テレビ画像はVRのようになっている。銀河の構造を脳のアナロジで語り、メタフィクションじみた仮説が語られる部分もある。それでも検閲には悩まされたく、サイバネティクスを独自の造語に置き換える羽目になっているが……。

ダルコ・スーヴィンは『Sの変容』(一九七九)で、本書をイワン・エフレーモフの『アンドロメダ星雲』(一九五七)等と並べ、「集団的ユートピアをつくりあげる個人の営為を示すことのでき

た」古典的ユートピア物語だと述べている。ここで「個人の営為」を強調するのは、スターリン主義的な文脈への批判がある。スーヴィンは『アンドロメダ星雲』を、脱疎外化された人間たちが中心となり、失敗を教訓として「行動」と思考と感情を同時共存させた冒険」を介し、「肉体的かつ倫理的な美」を描き出したと論じている(大橋洋一訳、国文社、一九九〇)。スーヴィンはこの構図にヘーゲルマルクス式の弁証法を重ね合わせているが、どちらかといえばカント的に思える。文体

はリルケに倣い、音楽がモチーフに採られ倫理のあり方も考えられる『マセララン雲』もまた、カント的な認識の限界に挑むものだ。そのうえでダイトルにもある「マセララン雲」は、統制的理念としてのユートピアを指し示す予定された希望として表象される。それさえもまた、未来をも管

理する政治に繋がりがねない。かような反省的思考による懐疑の徹底こそが、レムを唯一無二の作家たらしめているのだとしたら、こう結論づけられよう——『マセララン雲』を經由することなくして、作家・レムは「誕生」しなかつた。

(文芸評論家・作家)

詩と思想

好評発売中 定価 1430 円 (税込)

特集 高良留美子の人と世界

(評論) 佐川亜紀 竹内栄美子 河津恵恵
青木由弥子 佐相應一 谷口ちかえ
矢澤美佐紀 中村純 岡野幸江
渡辺みえこ 米田佐代子 小林孝吉
李修京

(巻頭言) 柴田三吉 (詩人論) 川岸直貴
(連載エッセイ) 長谷川忍
(この土壌に生きて) 佐々木洋一
(鮮血を流して) 松下たえ子
(我が母の道漢) 藤井雅人 結城文 かわいふくみ
(詩誌評) 後藤大祐 (詩集評) 斎藤恵子

土曜美術社出版販売

〒162-0813 新宿区東五軒町3-10 電話03-5229-0730